令和２年８月 28 日（金）　第６号

令和２年度学校だより　横浜市立緑園西小学校発行

緑　園　西

泉区緑園３丁目３９番地
http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/ryokuennishi/
℡（８１１）６０３０

命を守る

学校長　　立田　順一

新型コロナウイルスへの感染予防や熱中症対策など、このところ「命を守る」ことを意識する場面が増えました。もちろん、それらに加えて交通安全、風水害や大規模地震への備えも同じように大切です。

今から２年ほど前に、群馬大学名誉教授の片田敏孝先生の講演を伺う機会がありました。２０１１年（平成２３年）３月１１日、大津波によって多くの犠牲者を出した岩手県釜石市にあって、釜石市内の学校に通う小中学生約２,９００名は、そのとき学校にいなかった５名の犠牲者を除いて全員が助かり、「釜石の奇跡」と呼ばれました。その釜石市の防災教育に、震災前から１０年近くにわたって取り組んでおられたのが、この片田先生です。講演内容の一部分をご紹介をしますので、防災について改めて考えるきっかけにしていただけたら幸いです。

（１）地球温暖化による気候の変化により、局地的な豪雨などの大災害は「いつ・どこで」起きても不思議ではない。

（２）大災害は「忘れたころにやってくる」。それが「ひいおじいちゃんの時代にあったらしいよ」というように、危機意識の希薄化を招いてしまう。

（３）高いレベルの防災設備を整えることが、逆に「心のゆるみ」をつくってしまうことがある。東日本大震災でも、「高さ１０ｍの堤防があるから大丈夫だ」と思っていたところへ、それを超える高さの津波が襲い、大きな被害を生んだ。

（４）防災のレベルを上げれば上げるほど、人間はそれに依存し、想定にとらわれ過ぎてしまう。

（５）防災の最大の目的は、「災害ごとき」で人を死なせないことである。

（６）釜石の防災教育で一貫して伝えてきたことは、「大いなる自然の営みに畏敬の念をもち、他にゆだねることなく、自らの命を守ることに主体的であれ」という信念に基づく《避難３原則》である。

①想定にとらわれるな：相手は自然。想定を超える可能性も大きい。

②最善を尽くせ：そのとき、その状況下で、自分ができるベストを尽くすことが大切。平時のうちから、計画や準備など、できることを積み重ねておく。

③率先避難者たれ：人間の「大丈夫、安全だ」と思いたがる習性（正常化の偏見）が逃げ遅れを生む。それを打ち破り、まずは自分が逃げる。それが他の人の避難を誘い、結果的に多くの人命を救う。

（７）学校の教育だけでは不十分。子どもが学校にいる時間は、１年間の約「５分の１」。残りの「５分の４」は家庭や地域などにいる時間である。子どもは環境の影響を受けて育つ。学校、家庭、地域が連携し、互いに高い防災意識をもつことが、結果的に子どもたちの命を守ることになる。

……８月３１日（月）には、大規模地震の発生を想定した総合防災訓練を午前中に全校で行います。また、午後には１年生とその保護者の方を対象にした引き取り訓練を実施します。子どもたちの「命を守る」ための取組に、ご理解とご協力をお願いいたします。